

# グローバルエンジニア育成支援事業 (基礎力養成・高度育成)

---

2020年度 ヒアリング資料

徳山工業高等専門学校

# グローバル人材の意味を考える

グローバル化が進展している世界の中で、主体的に物事を考え、多様なバックグラウンドを持つ同僚、取引先、顧客等に自分の考えをわかりやすく伝え、文化的・歴史的なバックグラウンドに由来する価値観や特性の差異を乗り越えて、相手の立場に立って互いを理解し、更にはそうした差異からそれぞれの強みを引き出して活用し、相乗効果を生み出して、新しい価値を生み出すことが出来る人材

(産学人材育成パートナーシップグローバル人材育成委員会、2010)

世界的な競争と共生が進む現代社会において、日本人としてのアイデンティティを持ちながら、広い視野に立って培われる教養と専門性、異なる言語、文化、価値を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション能力と協調性、新しい価値を創造する能力、次世代までも視野に入れた社会貢献の意識などを持った人間

(産学連携によるグローバル人材育成推進会議、2011)

国内外で様々な国々を出身とする人々と協働し、その中でリーダーシップを発揮して、事業開発や運営に取り組める、**万能人間**？

# グローバル化と高等教育の国際化の関係

---

教育学者 Knight (2003)

グローバル化とは、技術、経済、知識、人々、価値、アイデアなどの国境を越えた流れ

↓  
教育の国際化に影響を与える

↓  
高等教育の国際化とは？

↓  
国家間、異文化間、あるいはグローバルな次元を、教育の目的、機能、あるいは提供するものに統合するプロセス

IBプログラム  
CDIOイニシアティブ  
JABEE認定

“技術、経済、知識、人々、価値、アイデアなどの国境を越えた流れ”

## グローバル化社会に対応した教育が包含する範囲

海外に出て活躍するようなグローバル人材の育成

日本国内で進行しているグローバル社会に対応できる人材の育成

(地域社会のグローバル化、さらには半径3メートルの身近な空間のグローバル化)

- ①世界のどこでも活躍できる人材
- ②旧来から続けられて来た日本企業の海外進出を担うような人材
- ③地域社会（あるいは半径3メートル）のグローバル化に対応できる人材



各高等教育機関がグローバル社会への対応を目指した教育を行うのか、あるいは行わないのか、そして行う場合には、**どのような教育目標を設定して、どのような教育を提供するのかは各教育機関の自由裁量**

個々の高等教育機関がグローバル化に対応した教育、研究体制、制度、あるいは施設を整えることは、設置基準等で必要不可欠な条件とされている訳ではない

### 【本校の学習教育目標】

「**世界に通用する**実践力のある開発型技術者をめざす人材の育成」

では、どのような教育を提供する？

# 近未来のKOSEN教育は？

## 徳山工業高等専門学校のカリキュラム・ポリシー（2019年度4月改正）

MCCで定められた5つの資質・能力（**基本的能力**、**専門的能力**、**汎用的技能**、**態度・志向性（人間力）**、**創造的思考力**）＋

### 6. 異文化対応力

技術者として世界のどこでも必要となる教養と感性を持ち、グローバルな視点で異文化に対応する能力。

### 7. 倫理的判断力

世界のどこかで活躍しようとも必要となる判断基準を持ち、技術者として自らの技術を公衆の安全、健康、福利を優先して活用するための能力。

異文化対応力と倫理的判断力を、どのように育成するか？

もともとSTEMに近い教育をやってきた→ STEAM教育に進化させる

(Science, Technology, Engineering, Mathematics)

(Science, Technology, Engineering, **Art**, Mathematics)

- **個人の学習者**のスタディー・ログ（学習履歴、学習評価・到達度など）の情報を把握・分析
- **個々の学習者**に対応した学習計画や学習コンテンツの提示
- **個々の学習者**の特性や発達段階に応じた学習支援
- **個々の学習者**と学習の場のマッチング

アダプティブ  
(個別最適化学習)

大学教育再生加速プログラム (AP) 事業  
グローバル高専事業 (展開型)  
4.0イニシアティブ (技術者教育パッケージ)  
MCCポートフォリオ教育実践拠点校  
MCC教学マネジメント実践校

教育プログラムの中で「**個別最適化**」した**グローバル人材**の育成が可能ではないか？

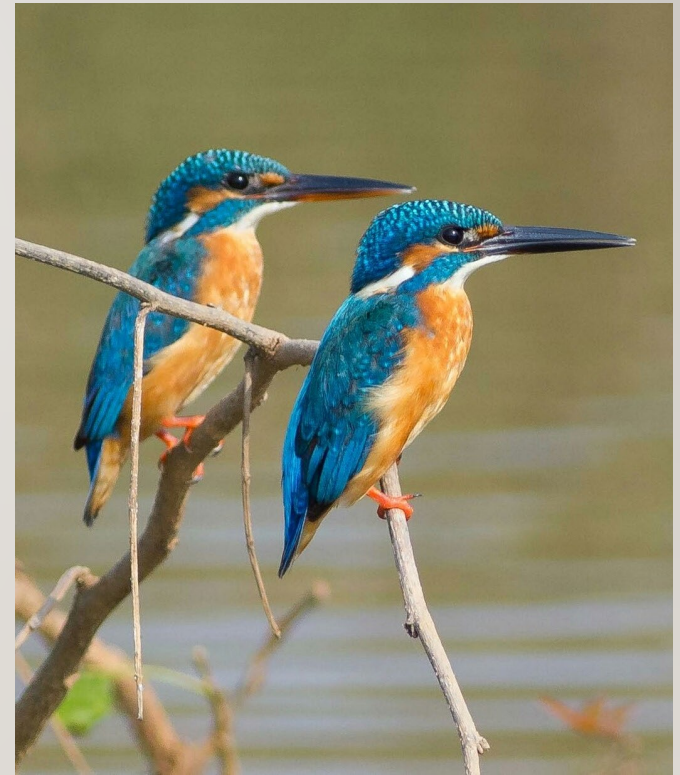
# “青い鳥” GLOBAL CHALLENGE PROGRAM の構築

---

## “青い鳥”Global Challenge Program

- 低学年基礎力の育成とIB認定による国際的質保証-  
(基礎力養成)
- CDIOイニシアティブ活用による高度グローバルエンジニア育成-  
(高度育成)

自分の身の回りにあるさまざまなものの価値を理解することができるようになり、あらためて「本当の幸せとは何なのか」を考える。グローバル化は、大きな世界の話ではなくて、**すぐそこに**.. グローバル化が起こっており、世界に飛び出すチャンスがあるという意味を込めた





# “青い鳥” Global Challenge Program

## - IB認定とCDIO加盟及びDS発行による多段階での国際的な技術者教育質保証システムの構築

地域企業群のグローバル化への対応と、学生の質の保証を実現するためには、教育改革の推進とカリキュラムマネジメントを中心とした教育課程全体の国際標準での改革が必要である。そこで国際的な視点から教育改革を推進するためCDIOイニシアティブに加盟するとともに、海外協定校と「クロスアポイントメント制度」を構築し、教員の相互交流により教育の国際化を実現する。さらに「サービラーニングターム制度」を導入し、協定校との間で学生の派遣・受入を促進し、国際ボランティア、インターンシップなどを通じて国際化を推進するため教育課程を再編成する。その成果として本科3年次までの教育プログラムのIB認定取得を目指す。

### 地域企業群からの要請 平成27年度

(高専機構教育改革推進プロジェクト：平成27年度アンケート調査)

- 国際社会を舞台に活躍できる人材
- 化学・化学工学の知識修得
- コミュニケーション能力 (英語力を含む)

### 大学教育再生加速プログラム (AP) 平成28～令和元年度

- “安全・安心志向型”徳山コアカリキュラム (TCC) の構築
- 継続的なキャリア形成が可能な信頼できる保証体制の構築
- キャリア教育支援システム (キャリアP) を活用したディプロマ・サブリメント (DS) 開発
- 学生の学びを促進するための環境の整備と教育力の向上

### グローバル高専事業 (展開型) 平成28～30年度

- 異文化に対する理解
- グローバル化に対応するための「知識を学ぶための方法」
- グローバル化に対応するための「課題発見・解決力」
- グローバル化に対応するための「高度な専門知識」
- 英語による一般科目・専門科目の推進
- 教材の開発・出版 (異文化理解系)

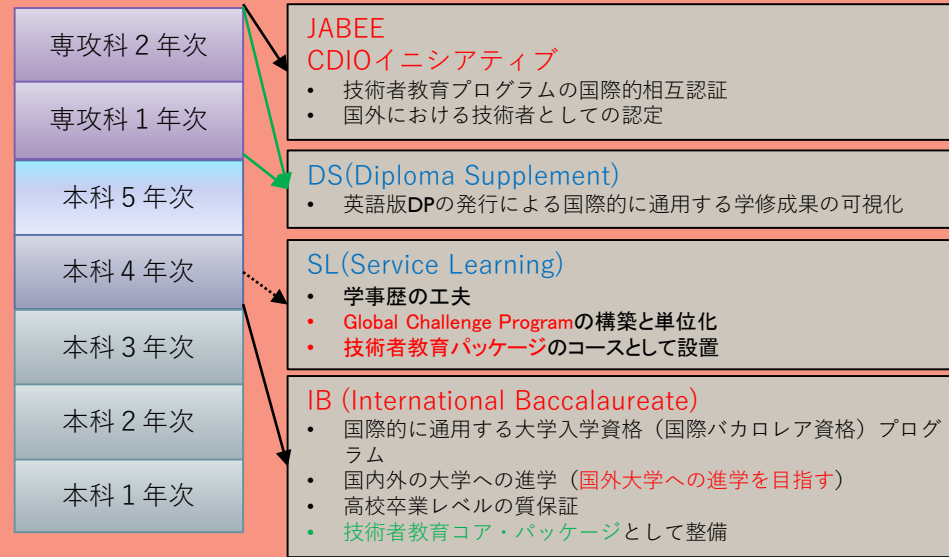
### グローバルエンジニア育成事業 令和1～5年度

(グローバルエンジニア基礎力養成プログラム)

- 中学校とのスムーズな連携教育
- アダプティブ英語 e-Learning システム導入
- 授業形態・方法の多様性に対応 (CLILコンテンツの開発・出版)
- 英語科目以外の授業の英語化
- 海外語学研修等の単位化
- 柔軟なカリキュラム編成 (完全セメスター制：クォーター科目の導入)
- 自学自習時間の確保 (カリキュラム再編：学修単位科目整理)
- 学科学年横断縦断型STEAMプロジェクト導入
- Ai Grow 等による異文化対応力等の可視化
- GTEC 4 技能試験による英語力の可視化
- IB (日本語DP) プログラム認定取得 (高度グローバルエンジニア育成プログラム)
- 個別最適化「技術者教育パッケージ」単位化
- サービス・ラーニングターム導入
- “青い鳥” Global Challenge Program 構築
- TOEIC、TOEFL等による英語4技能の可視化
- Ai Grow 等による異文化対応力等の可視化
- 教職員海外研修の強化 (フィリピン大学ディリマン校等)
- ディプロマ・サブリメント (DS) 英語版発行
- CDIO イニシアティブ加盟

### グローバルに活躍する技術者 → 教育のグローバルレベルの質保証

#### 世界標準レベルの技術者教育改革を推進



#### 海外協定校

(シンガポール・香港・中国・タイ・インドネシア、フィリピンなど)  
「クロスアポイントメント制度」の構築

- 教員の派遣・受入、学生の派遣・受入

- 世界的水準の教育動向の把握
- 教職員の国際化

#### 教育課程改革

「サービラーニングターム制度」導入

- STEAMプロジェクト (技術者教育パッケージ：個別最適化)
- 学生の派遣・受入数の拡大

- 英語力の向上
- 異文化対応力の向上

#### 大学教育再生加速プログラム (AP)

グローバル高専事業  
グローバルエンジニア育成事業

IB認定、CDIOイニシアティブ参加  
調査  
施設整備・準備

2021 or 22年度：CDIOへの加盟  
2023年度：IB認定 (DPプログラム) 取得

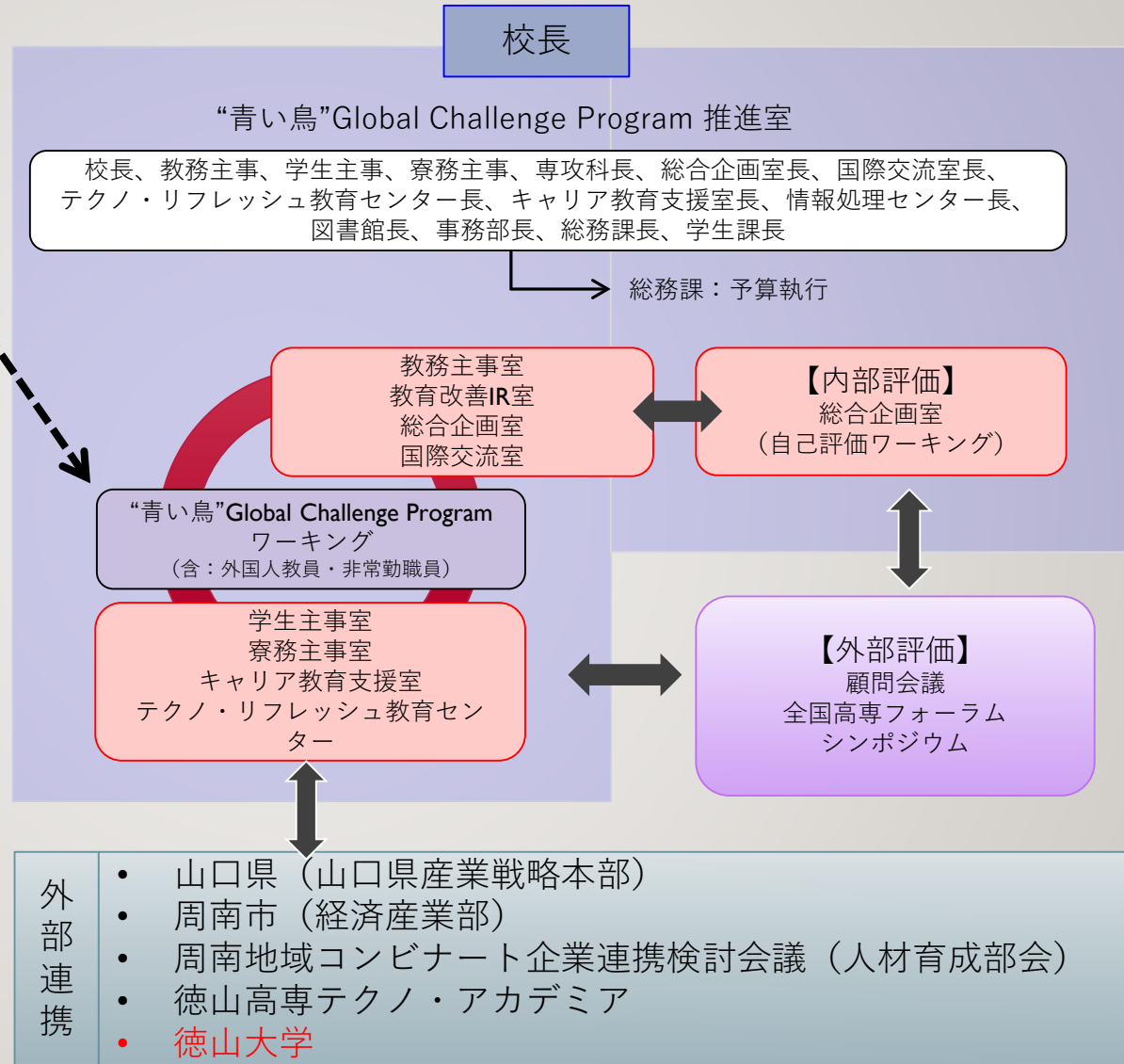
国際標準質保証システムの構築



# 事業の実施体制

- 外国人教員**
- 英語関連授業指導内容等見直し
  - CLIL教材共同開発
  - CLIL授業実践
  - 授業英語化メンター
  - 教職員語学研修
  - 海外高等教育機関との連携
- 非常勤職員**
- 学生海外交流関連書類作成
  - 教職員海外派遣等関連書類作成
  - CDIO加盟準備（書類等）
  - CDIO加盟プレゼンテーション準備
  - IB加盟書類準備
  - IB加盟による効果の分析

- CDIO加盟**
- CDIO学外研修会
  - CDIO学内研修会の企画・主催
  - CDIO加盟に必要な施設整備
  - CDIO加盟に必要な書類の準備
  - CDIO加盟申請
  - CDIO加盟審査
- IB認定取得**
- IBに関するFD研修
  - IBに関する学内勉強会（TOKなど）
  - IB取得のための授業改革
  - IB取得準備
  - IB加盟申請



# 事業の成果

“青い鳥” Global Challenge Program 工程表

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
2019年					“青い鳥” Global Challenge Program 実行委員会設置							
					プログラム検討・開発(試行)							
					サービスマーケティングチーム導入方法の議論・決定							
					“青い鳥” Global Challenge Program の構築							
					英語教育改善、CLILコンテンツ等の作成、CLIL授業試行							
					e-learningシステムの試行・導入決定 CDIOイニシアティブ、IB認定校等訪問調査 教職員海外研修							
2020年					プログラム(コンテンツ等の評価・改善)							
					サービスマーケティングチーム試行							
					“青い鳥” Global Challenge Program 実施							
					英語教育改善、CLILコンテンツ等作成、CLIL授業実施							
					アンケート等による評価・改善検討							
					CDIOイニシアティブ認定校等訪問調査及び申請準備、IB認定校等調査訪問調査 教職員海外研修							
2021年					プログラム(コンテンツ等の評価・改善)							
					サービスマーケティングチーム実施							
					“青い鳥” Global Challenge Program 実施							
					英語教育改善、CLILコンテンツ等作成、CLIL授業実施							
					CDIOイニシアティブ及びIB(日本語DPプログラム)申請準備							
					アンケート等による評価・改善検討							
2022年					コンテンツ等の評価・改善							
					サービスマーケティングチーム実施							
					“青い鳥” Global Challenge Program 実施							
					英語教育改善、CLILコンテンツ等の作成、CLIL授業実施							
					CDIOイニシアティブ申請							
					IB(日本語DPプログラム)申請準備(1月に認定申請)							
2023年					アンケート等による評価・改善検討							
					コンテンツ等の評価・改善							
					サービスマーケティングチーム実施							
					“青い鳥” Global Challenge Program 実施							
					IB(日本語DPプログラム)審査							
					英語教育改善、CLILコンテンツ等の作成、CLIL授業実施							

“青い鳥” Global Challenge Program 到達目標

成果指標	第3期平均	R1年度	R2年度	R3年度	R4年度	R5年度
英語力：TOEIC（本科卒業時平均）	378.5	400	420	440	460	500
英語力：TOEIC（専攻科修了時平均）	472.1	500	525	550	575	600
海外経験・海外活動（参加人数）	75.2	100	120	150	180	200
教育効果（AI GROWスコア）	なし	0.3	0.4	0.5	0.6	0.7
海外短期・長期研修（受入人数）	15.8	20	30	40	50	60

## 2019年度以前

- 異文化対応力テスト共同開発
- 異文化理解系教科書作成
- CLIL授業開発と展開
- GTEC 4 技能試験導入
- 海外研修プログラムの充実
- トビタテ！留学JAPAN採択多数

## 2019年度

- 7月に新教育課程「**グランド・デザイン**」開示
- Global Challenge Program** 構築開始
- 技術者教育パッケージプログラム導入検討開始
- 新カリキュラム検討（含：**異文化理解系コンテンツ**）
- 英語5技能教育プログラム**検討（**e-Learning**システム試行）
- 学科学年横断縦断型**STEAM**プログラム試行
- 教材開発（**CLIL for Critical Thinking**等）
- Native Speaker Global Coordinator** 雇用
- 教員海外研修実施
- ディプロマ・サプリメント**発行による資質・能力の可視化

## 2020年度

- グランドデザインに基づく教育改革推進
- サービスマーケティングチーム試行
- Global Challenge Program**（一部）開始
- 英語**5技能**教育プログラム実施
- CLIL for Critical Thinking**等の教材開発
- Native Speaker**の常勤雇用
- 教員海外研修実施

（共通）  
基礎力養成  
高度育成

- ディプロマ・サプリメント（英語版）発行（高度育成）**
- CDIOイニシアティブ加盟（高度育成）**
- IBDPプログラム認定審査受審（基礎力養成）**

## 【第4期中期目標期間への展開（見込み）】

「地域企業群のグローバル化における課題を発掘し、それを解決するための能力を備えた人材」の育成を、国際的に通用する**IBDP**プログラム認定（本科3年修了時）、**英語版ディプロマサプリメント（準学士）、JABEE**プログラム修了（学士）の**3段階で保証**し、さらに**CDIOイニシアティブ**への加盟により、国際的な標準に基づいた継続的な改革をカリキュラムマネジメントにより行う。

# 視点I： 教育活動、教育支援、アセスメントと対応した教育目標設定

## 【本校の学習教育目標】

これは教育目的  
では??

「世界に通用する実践力のある開発型技術者をめざす人材の育成」

(A) 「世界に通用する」技術者をめざすために

(A1) 複合分野の基礎となる基本的素養を身につけること

- ・ 数学・自然科学・基礎工学の科目を修得する
- ・ 学士を取得する

(A2) 国際理解を深め、技術者としての倫理観とコミュニケーション能力を養うこと

- ・ 国際文化・技術者倫理・日本語・外国語の科目を修得する

ここからが教育  
目標??

協調性  
新しい価値を創造する能力  
次世代までも視野に入れた社会貢献の意識

はっきりとした科目としてはない（一部科目で実施）  
（学科学年横断縦断型STEAM教育プログラム構築）



## 視点II： 教育活動

### 1. 海外プログラムを含む全体的なカリキュラム設計

海外プログラム（必修・選択）が、英語教育科目や異文化理解・異文化対応力育成科目、英語で専門を学ぶ科目などと、どのようなつながりを持ってカリキュラムの中に埋め込まれているか？

海外プログラムが他の科目やプログラムと切り離されて行われているのでは、教育効果が薄い

海外研修プログラムの単位化（**基礎力養成：1**） 5つのJASSO支援プログラムの単位化を決定

カリキュラムマップ → 作成が必要



## IB認定について

まさに我々が目指すに相応しい教育プログラム！

「国際バカロレア（IB）は、多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成を目的としています。

この目的のため、IBは、学校や政府、国際機関と協力しながら、チャレンジに満ちた国際教育プログラムと厳格な評価の仕組みの開発に取り組んでいます。

IBのプログラムは、世界各地で学ぶ児童生徒に、人がもつ違いを違いとして理解し、自分と異なる考えの人々にもそれぞれの正しさがあり得ると認めることのできる人として、積極的に、そして共感する心をもって生涯にわたって学び続けるよう働きかけています。」

文部科学省IB担当者2名及び教育評論家1名と懇談

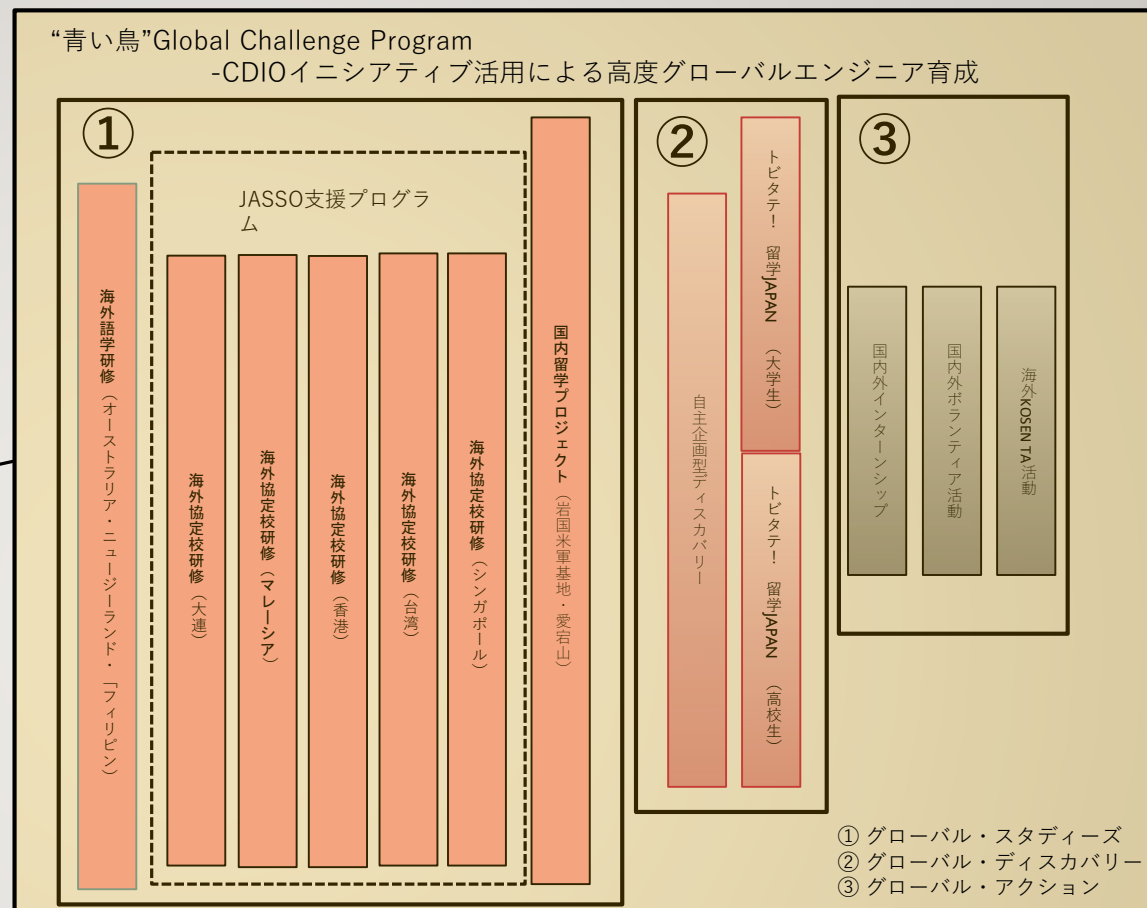
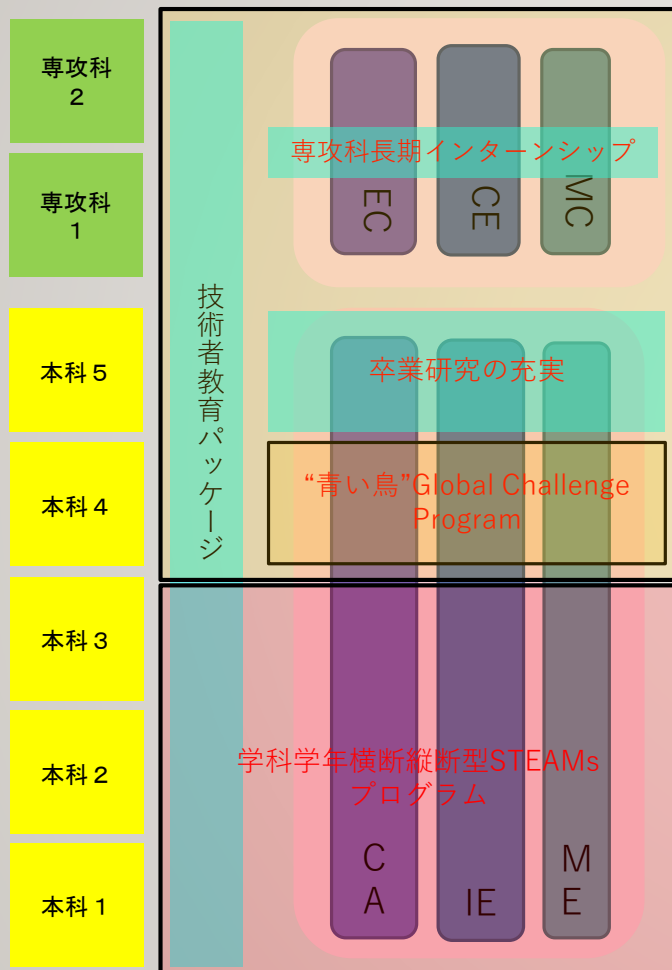
### IB・DPプログラム

→ 所定のカリキュラム（TOK, CAS, EEがCore科目）を2年間履修し、最終試験を経て所定の成績を収めると、国際的に認められる大学入学資格（国際バカロレア資格）が取得可能。日本語での実施が認められている。

### IB・CPプログラム

→ 生涯のキャリア形成に役立つスキルの習得を重視したキャリア教育・職業教育に関連したプログラム。認定もDPプログラムよりハードルが低く高専向きだが、日本語での実施は認められていない。

# “青い鳥” Global Challenge Program 全体像



- “青い鳥”Global Challenge Program  
-低学年基礎力の育成とIB認定による国際的質保証
- 中学校とのスムーズな接続教育(個別最適化 e-Learning システム導入)
  - 授業形態・方法の多様性に対応
  - 他の高等教育機関との単位の整合性確保 (IB認定取得)
  - 柔軟なカリキュラム編成
  - 自学自習時間の確保
  - 生きる力(ジェネリックスキル)育成
  - グローバル人材育成
  - 変人(特殊な技能に特化した)、タコ足(?)型人材育成

## 2. 英語コミュニケーション力育成科目のカリキュラム

①英語科目間の連携かつ段階的なつながりがどのように図られているか

- 内容の統一性の確保
- 英語科目間の連携
- 学年進行に伴う統合的な段階性

②英語コミュニケーション力を特に高めたい学生及び英語コミュニケーション力が特に低い学生に対してどのようなオプションが用意されているか

- 教育目標に応じた英語コミュニケーション能力の育成の仕組みになっているか
- 教育目標を達成するために組織としてどのような工夫が凝らされているか

(基礎力養成：2) グループオンラインレッスン導入  
多読多聴授業再開（新任英語教員採用→後期実施に向けて準備中）

カリキュラムマップ → 作成が必要



# 英語は5技能教育へ！

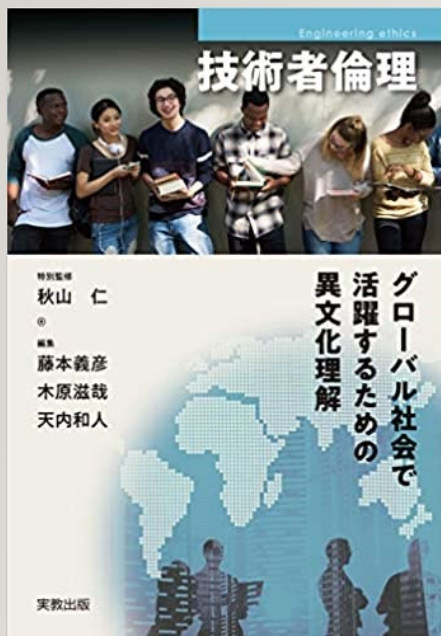
校種	科目 (イメージ)	CEFR レベル	聞くこと	読むこと	話すこと (やり取り)	話すこと (発表)	書くこと
高等学校	4技能総合型 複数の技能を統合させた言語活動が中心 (選択科目、必修科目) (必修科目) 発信能力向上のための言語活動 (スピーチ、プレゼンテーション、ディスカッション等) が中心 (必修科目)	B1	<ul style="list-style-type: none"> <li>ゆっくりはっきりと、馴染みのある発音で話されれば、身近な話題に関する比較的長い会話や身近な事柄に関する説明の概要や要点を理解できるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>身近な話題に関する比較的短い記事、レポート、資料の概要や要点を理解し、必要な情報を読み取ることができるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>身近な話題や知識のある話題について、平易な英語を用いて情報や意見を交換することができるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>時事問題や社会問題について、具体的に説明するとともに、自分の意見を加えて話すことができるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>関心のある分野の話題について、つながりのある文章で具体的に説明するとともに、自分の意見を加えて書くことができるようにする。</li> </ul>
		A2	<ul style="list-style-type: none"> <li>ゆっくりはっきりと、馴染みのある発音で話されれば、身近な話題に関する短い会話や身近な事柄に関する短い説明の概要や要点を理解できるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>身近な話題に関して平易な英語で書かれた短い説明を読み、概要や要点を理解できるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>日常生活に関する事柄や個人的な関心事 (趣味、学校など) について、ある程度準備をすれば会話に参加することができるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>身近な話題について、簡単な語句や文を用いて、自分の意見やその理由を短く述べることができるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>身近な事柄 (自分、学校、地域など) について、簡単な語句や文を用いて、短い説明文を書くことができるようにする。</li> </ul>
中学校	中学校での学習内容の活用を通じた定着を含む 英語	A1	<ul style="list-style-type: none"> <li>ゆっくりはっきりと、馴染みのある発音で話されれば、身の回りの事柄 (自分、学校、地域など) に関するごく短い会話や説明を理解することができるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>興味のある話題に関して平易な英語で書かれたごく短い説明を読み、イラストや写真を参考にしながら、概要を理解することができるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ごく身近な話題であれば、基本的な表現を用いて簡単な質疑応答をすることができるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>身近な話題について、発表内容を準備した上で、簡単な語句を用いて複数の文で意見を述べるることができるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分に関するごく限られた情報 (名前、年齢、趣味、好き嫌いなど) を、簡単な語句や文で書くことができるようにする。</li> </ul>
		(Pre-A1)	<ul style="list-style-type: none"> <li>ゆっくりとはっきりと、繰り返し話されれば、</li> <li>短い簡単な指示や挨拶を理解することができるようにする。</li> <li>身近で具体的な事物を表す単語を聞き取ることができるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>身近で具体的な事物を表す単語の意味を理解することができるようにする。</li> <li>アルファベットを見て識別し、発音できるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>相手のサポートがあれば、個人的な関心事 (趣味、学校など) についての質問に答えることができるようにする。</li> <li>日常の挨拶をしたり、挨拶に回答したりすることができるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分に関するごく限られた情報 (名前、年齢、好き嫌いなど) を、簡単な語句を用いて伝えることができるようにする。</li> <li>定型表現を用いて、簡単な挨拶ができるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>例文を参考にしながら、慣れ親しんだ語句や文を書くことができるようにする。</li> <li>アルファベットの大字と小文字をブロック体で書くことができるようにする。</li> </ul>
小学校	小学校での学習内容の活用を通じた定着を含む 英語 (教科型) 4技能 (聞く、話す、読む、書く) 慣れ親しみから「気付き」へ 英語 (活動型) 2技能 (聞く、話す)						

出典: 中央教育審議会 教育課程企画特別部会「論点整理」(平成27年8月)



### 3. 異文化理解・異文化対応力育成科目のカリキュラム

- ① 異文化理解・異文化対応力育成科目がどのように用意されているか。  
特に日本語以外を用いる科目がどの程度配置されているか。
- ② 異文化理解・異文化対応力を高める科目が他のプログラムとどのように連携しているか。



(高度人材：5)

本校の教員1名編者、教員3名が著者として教科書作成（出版）  
専攻科「国際比較文化論」のみ開講

本科で異文化理解に関する科目及びカリキュラムマップは未完成

カリキュラムマップ → 作成が必要

異文化対応力測定ツールとしてAiGrowの活用を開始

## 4. 専門を英語で学ぶ科目のカリキュラム

- ① 英語による専門科目がどの程度準備されているか
- ② 英語科目との連携がどのように図られているか
- ③ 日本語による専門科目との連携がどのように図られているか

(基礎力養成：6、高度人材：7)

アメリカ人特任准教授を雇用し、日本人教員（生命科学）とともに新しいCLILコンテンツを準備

- 日本人教員が本科1年生「ライフサイエンス&アースサイエンス」にて**CLIL**授業を3回実施
- アメリカ人特任教員が新しい**CLIL**コンテンツ（**CLIL for Critical Thinking**）を準備

(2012年度後期に本科4年生の授業で実施予定、出版社とコンテンツの出版に関して打ち合わせ中)

## 5. 正課の海外プログラム（留学を含む）

- ① 参加率・履修率
- ② 事前学習→海外プログラム→事後学習の関連が図られているか

参加数は年々増加しており、**2019**年度には語学研修を含めて**100**名以上の学生（全学生約**700**名）が短期・長期で海外研修に参加した。特に本校ではトビタテ！留学JAPANへの採択が高校生コース、大学生コースとも非常に多く、学生数に対する採択数は日本でも有数（おそらく採択率1番）であったと思われる。

残念ながら、コロナ禍により、**2020**年度から全てのプログラムが中止となり、現在、海外への学生派遣は全て中止されている。協定校とのオンライン交流なども実施したが、さらに工夫し、現在、豊橋技術科学とも協議しながらアフターコロナも視野に入れつつ国際協働オンライン学習プログラム（Collaborative Online International Learning = COIL）の構築と展開を協定校と交渉中である

## 視点III： 教育支援（支援制度・教育環境・組織体制）

### 1. グローバル化に対応した教育支援

- ① 経済的サポート体制の充実度
- ② 履修上、海外プログラム等に参加しやすい仕組みが用意されているか
- ③ リスク対策、セキュリティー対策の充実度

② 弱い→一部の学年で「サービ斯拉ーニングターム導入」はさらなる議論が必須（一部科目では週2回開講を実施中）

③ JCSOSの海外危機管理研修の開催（2020年3月に予定していたがコロナ禍のため中止。今年度の開催を目指す）



## 2. キャンパスのグローバル化を活用した教育支援

- ① 看板等の英語化（実施済み）
- ② ピアサポート（実施済み）
- ③ メンター制度（実施済み）
- ④ 混在寮（実施済み）
- ⑤ 海外留学生との交流を異文化体験や英語コミュニケーション能力向上につなげるどのような仕組みがあるか

メンター制度  
混在寮  
SA(Student Ambassador)

トビタテ！留学JAPANへの参加学生を中心としてSA（Student Ambassador）同好会を設立。全国の国際交流関係の部活や同好会とゆるい全国組織を構築

### 3. 組織体制

- ① グローバル化対応教育を推進する組織
- ② 教員が無関心
- ③ 学科等との連携

グローバルエンジニア育成推進委員会

国際交流室

連携が弱い

各学科

ここに関しては、残念ながらあまり改善が見られない。モンゴルKOSENやタイKOSENへの支援事業がきっかけとなって連携が進むことを期待している。

視点Ⅳ： 個々の学生の達成度評価とカリキュラムマネジメントに  
資する **アセスメント**

## 1. 学生の達成度のアセスメント

語学および語学以外について

- ①語学→GTEC, TOEIC, 英検
- ②Ai Growの全学生実施（2020年度分析結果はまだきていない）
- ③「異文化対応力テスト（高専版）」グローバル人材育成教育学会と協働  
開発：海外研修等の効果測定）
- ④高専版 JSAAP構築（学生実態調査）リアセックと共同開発

データを蓄積・分析してカリキュラムマネジメントに！

## 令和2年度の具体的取組

- ① CDIOイニシアティブ加盟準備(CDIO加盟校訪問調査) 参加予定だったMT(モンゴル、タイ)は中止
- ② IB・DPプログラム認定校訪問調査
- ③ 国内グローバル、IB関連学会等への参加(オンラインで参加)
- ④ 高専版 Global JSAAPシステム構築
- ⑤ 教職員海外語学研修(エンデランカレッジ)
- ⑥ 教員海外研修(協定校訪問、新規協定校開拓等)
- ⑦ 教職員国内研修(オンラインで参加)
- ⑧ 学生・教職員研修会(オンラインで実施)
- ⑨ イベント費用(近未来 Global KOSEN、全国SA大会)
- ⑩ 英会話(On line):専攻科生対象(事業費全額負担)
- ⑪ 異文化コミュニケーション研修等(オンライン)
- ⑫ 英語・異文化理解系教育関連図書整備
- ⑬ 国際交流室設置(オンライン交流等備品整備)
- ⑭ 人件費 特任准教授1名、非常勤事務1名
- ⑮ 非常勤事務:ほか1名(国際交流室経費)



# グローバルエンジニア育成事業を成功させるには・・・

---

コロナ禍を乗り越え、その終息後に備え、New Normalなグローバル人材育成プログラム等の構築が必要



人材が国際的な社会性あるいは公共性を持つ



異文化を理解しているということではなく、多文化の中で考え行動できるという認識が必要



学生たちが「主体的に」学習に取り組むことが大切であるように、教職員が能動的に様々な学習に取り組むことが必要